

養護教諭が職務上抱える困難に関する文献検討

藤村 友美* 石田 靖彦**

*教育心理学領域

**学校教育講座 (心理学)

Literature Review on Difficulties in Accomplishing the Duties of *Yogo* Teachers

Tomomi FUJIMURA*, Yasuhiko ISHIDA**

* Graduate Student, Aichi University of Education, kariya 448-8542, Japan

** Department of School Education (Psychology), Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

要 約

本研究では、CiNii を用いて「養護教諭 困難」をキーワードにして論文検索を行い、小・中学校、高等学校に勤務する養護教諭の職務全体における困難に関する文献 11 件を対象に、見出された困難を整理した。そして、11 件の文献から 123 個の困難を抽出し、それらを対人的な業務と非対人的な業務の枠組みに基づいて分類した。さらに、対人的な業務については、養護教諭が関わる児童生徒、教職員、保護者、関係機関の枠組みに基づいて分類した。その結果、対人的な業務については、児童生徒の困難において「処置対応」「健康相談活動」「保健指導・保健学習」、教職員の困難において「教師との連携」「養護教諭との関係」、保護者の困難において「保護者による要望への対応」、関係機関の困難において「校外機関との関係」が見出された。非対人的な業務については、「多様な業務への対応」「業務の量的負担」が見出された。今後、困難を軽減するためには、連携や役割分担が必要不可欠であり、教師や関係機関と連携を図っていくには、大学の教員養成課程段階から連携のための学びに取り組むことが大切であると考えられた。

Keywords : 養護教諭 困難性 文献レビュー

I. 問題と目的

養護教諭の役割は、近年の社会環境や生活環境の変化に伴う児童生徒の健康問題の深刻化により多岐にわたるとともに重要性が増している。

児童生徒が抱える慢性疾患は増加しており、養護教諭は健康管理を的確に行い、教師と連携した支援が求められている(岡本・郷木, 2021)。また、養護教諭の職務の特質から、いじめなどの早期発見・早期対応を図ることが期待されている(中央教育審議会, 2008)が、いじめの件数は増加傾向にあり、長期欠席者や不登校児童生徒数も増加している(文部科学省, 2021)。さらに、新型コロナウイルス感染症の感染拡大は、感染に対する不安や、行動制限による寂しさなど、心の健康への影響が懸念され(川畑・村中・中村, 2020)、児童生徒の心身の状況把握が一層重要となっている。

学校における養護教諭の役割や重要性が増す中、養

護教諭が専門職として活躍し、さらに学校運営の推進に貢献するには、養護教諭自身が良好な精神的健康を保持し勤務できることが肝要である(柴田・齋藤・山脇, 2020)。しかし、児童生徒の抱える問題が年々深刻化する中、養護教諭はさまざまな困難を抱えながら職務を遂行していることが推察される。

養護教諭が職務上抱える困難については、これまでも研究が行われてきた。たとえば、救急処置に関する困難について、武田他(2008)は、「判断・対応に関する困難」「保護者に対する困難」「学校内での困難」「処置技術に関する困難」「地域医療体制に関する困難」があることを報告している。その中で、「判断・対応に関する困難」が最も多く、大部分の養護教諭が緊急時の判断・対応に困難と感じていると述べている。心因性の健康相談については、「児童生徒は訴えにくい」「保護者の協力が得られない」「チームでの支援体制の不備」「関係機関との連携不足」「養護教

論の力量不足」といった困難があることが報告されている(菊池・二木・奥井, 2014)。

これらの先行研究では、養護教諭が職務上抱える困難が明らかにされているが、救急処置や、心因性の健康相談など、活動場面が限定されている。また、養護教諭の職務全体における困難に関する研究は、職務全体を対象としている点では共通しているが、困難を分類する枠組みは、それぞれに異なっている(佐光他, 2008; 鎌田, 2016)。現在の養護教諭が抱える問題を検討する上で、これまでの先行研究で見出された困難を整理して、どのような困難に分けられるのか、改めて検討する必要がある。

諸富・大竹(2002)は、教師の悩みの大半は人間関係に起因するものであると述べ、「子どもとの関係の悩み」「保護者との関係の悩み」「同僚・管理職との関係の悩み」に分類している。高橋・中村(2006)は、「養護教諭の教育上の困難」には人間関係によるものが多かったことを報告している。つまり、教師や養護教諭が抱える困難は、対人関係に起因する業務が多くを占めているといえる。また、佐光他(2008)は、養護教諭の連携における困難を、教職員、保護者、校外機関に分けて整理している。養護教諭の関わる相手には、児童生徒をはじめ、教職員、保護者、関係機関が考えられる。このことから、これまでに見出されている困難を、対人的な業務と非対人的な業務の観点で分類し、対人的な業務については、児童生徒、教職員、保護者、関係機関の枠組みに沿って整理することで、困難の意味をより詳細に捉え、軽減策について検討することができる考えた。

そこで、本研究では、一般校に勤務する養護教諭の職務全体における困難を対象にして、これまでに明らかにされた困難を整理するとともに、それらの困難を対人的な業務と非対人的な業務の観点で分類し、困難の意味や軽減策について検討する。本研究の知見は、今後、養護教諭が抱える困難に関する研究や、困難の軽減策に関する研究資料の一助となり得ると考える。

II. 方法

文献検索データベース CiNii Articles では、「養護教諭 困難」をキーワードにして、期間を限定せずに検索すると、131 件の文献が検出された(2021 年 9 月 12 日実施)。論文のタイトルと抄録から、小・中学校、高等学校(以下、「一般校」と記す)の養護教諭及び、大学に勤務する保健室担当者の困難に関する 52 件の文献を抽出した。そのうち、困難事例から救急処置における思考プロセスを類型化した文献や、児童生徒とのかかわりに困難さがあつた養護教諭による事例検討会後の行動修正に関する文献等を除外したところ、一般校の養護教諭及び、大学に勤務する保健室

担当者が職務上抱える困難に関する文献は 42 件であった。その中から、限定的な場面に関する困難を除外し、一般校に勤務する養護教諭の職務全体における困難に関する文献 11 件を対象とした。

分類の対象とする困難の抽出について、調査方法が、質問項目に困難を感じたかどうかを選択するものや、困難と感じた項目を複数回答するものについては、研究者が結果において困難として取り上げたものを対象とした。自由記述やインタビューで見出された困難は、各研究で研究者が困難としてまとめたものを対象とした。

困難の分類は、前述のとおり、養護教諭の困難は対人関係に関するものが多いことを踏まえて、対人的な業務と非対人的な業務の枠組みに基づいて分類した。さらに、対人的な業務については、児童生徒、教職員、保護者、関係機関の枠組みに基づいて分類した。そして、それぞれの枠組みに分類された困難は、意味内容の類似性で統合して整理した。

なお、分析における信頼性と妥当性を確保するために、筆者と心理学を専門とする大学教員 1 名の計 2 名で協議しながら実施した。

III. 結果

1 対象文献の困難

以下では、各研究において抽出された困難について簡単に説明する(Table 1)。

池田・芝木(1985)は、僻地小規模校の養護教諭が新任 3 年間に遭遇した職務遂行上の困難点について、実践内容に困難を感じたか、感じなかったかの選択式による質問紙調査をした。困難には、「疾病異常者の健康管理」「毎日の健康観察における情報の整理・検討」「保健室での対応における情報の整理・検討」など 24 個が抽出された。

佐藤(1995)は、養護教諭の執務における困難点及び満足・不満足要因について、自由記述による質問紙調査をした。困難には、「大規模で子供を十分に捉えきれない」「他の教師と対等に扱われない」「養護教諭の職務や仕事に対するまわりの理解が得られない」などにまとめられた 10 個が抽出された。

萩野・林・江原・木村(2002)は、養護教諭の学校保健活動展開における困難について、20 項目のうち困難と感じている 5 項目を選択する質問紙調査をした。困難には、「心の健康問題に対するカウンセリング能力」「学校保健に関する組織的活動の展開」「学校の教育活動における学校保健の位置づけ」など 6 個が抽出された。

小島(2002)は、養護教諭が体験した困難について、9 項目のうち困難を感じたもの全てを選択する質問紙調査をした。困難には、「不登校児」「生徒の保健室

Table 1 一般校の養護教諭が職務上抱える困難に関する文献から抽出された困難

著者名 年号	調査の概要	困難の抽出基準	抽出された困難
池田 他 (1985)	僻地小規模校の養護教諭が新任3年間に遭遇した職務遂行上の困難点について調査するために、養護活動の実践内容について、困難を感じたか、感じなかったかの選択式による質問紙調査を実施	結果において、困難として取り上げられた50%以上の養護教諭が困難を感じたと回答したもの	疾病異常者の健康管理、毎日の健康観察における情報の整理・検討、保健室での対応における情報の整理・検討、児童生徒に対する相談時間の確保、健康相談における情報の整理・検討、児童保健委員会への指導、保健室での対応における指導、集団保健指導、担任への資料の提供・助言、保健だよりの内容検討、掲示物の検討、保健学習のための資料の提供・助言、健康診断における教師対象の事前指導、健康相談における担任との話し合い、定期的点検、環境の衛生・安全の維持・改善、健康診断における保護者対象の事後指導、健康相談における保護者との話し合い、健康相談における関係者との話し合い、学校保健委員会への資料の提供・助言、学校保健安全計画の原案作成、学校保健活動の評価、校外における一般教育関係、校内における一般教育関係【24】
佐藤 (1995)	養護教諭の執務における困難点及び満足・不満足要因について調査するために、自由記述による質問紙調査を実施	困難としてまとめられたもの全て	大規模校で子供を十分に捉えきれない、他の教師と対等に扱われない、養護教諭の職務や仕事に対するまわりの理解が得られない、地域における父母との連携や理解協力に関すること、近くに医療機関がない、雑務が多くて本来の仕事ができない、自分の仕事に確信がもてない、学校保健専門職の配備、財政的問題、研修の機会が少ない【10】
萩野 他 (2002)	養護教諭の学校保健活動展開における困難について調査するために、学校保健活動を展開する上での基本的な機能20項目のうち困難と感じた5項目を選択する質問紙調査を実施	結果において、困難として取り上げられた6個	心の健康問題に対するカウンセリング能力、学校保健に関する組織的活動の展開、学校の教育活動における学校保健の位置づけ、教職員・管理職・保護者との人間関係、健康問題を教育問題としての提起、児童生徒との日常的かかわりにかける時間的余裕【6】
小島 (2002)	養護教諭が体験した困難について調査するために、予め用意した9項目のうち、困難に感じたもの全てを選択する質問紙調査を実施	結果において、困難として取り上げられた3個	不登校児、生徒の保健室登校、生徒間のいじめ【3】
高橋 他 (2006)	養護教諭が抱えている教育上の困難な問題の実態について調査するために、自由記述による質問紙調査を実施	困難としてまとめられたもの全て	子ども自身の問題、養護教諭の職務上の問題、学校教職員の問題、教育全体における学校行政の問題、保護者の問題、養護教諭に関する学校行政の問題【6】
佐光 他 (2008)	養護教諭が日常の養護実践において感じる困難感と研修ニーズについて調査するために、カードの枚数に制限を加えずに、1枚のカードに1項目を自由記述する調査を実施	困難としてまとめられたもの全て	救急処置、子どもへの保健室での対応、健康相談活動、保健教育、教職員との関係、保護者との関係、校外機関との関係、パソコン活用、学校保健委員会の運営、保健室環境、事務処理、時間的ゆとりの欠如、勤務時間外の業務【13】
中下 他 (2010)	経験の浅い養護教諭が抱く職務上困難感と課題について調査するために、養護教諭の職務内容について自由記述と3件法による質問紙調査を実施	結果において、困難として取り上げられた新規採用者の困難3個、5年経験者の困難6個、いずれの養護教諭ともに困難感を示した4個	日常における救急処置・救急体制、緊急時における救急処置・救急体制、感染症予防、健康相談活動における方法、集団指導、個別指導、保健学習、保健指導・保健学習における連携、健康相談活動における連携、保健組織、保健室経営計画、学校保健委員会、保健室の設備備品【13】
石田 他 (2016)	一人配置の養護教諭が抱く職務上困難感について調査するために、職務上の困難感19項目について4件法による質問紙調査を行い、自己教育力の高さと職務上困難感の関連について検討	結果において、困難として取り上げられ、調査で扱われた項目19個	救急処置、受診が必要かどうかの判断、複数来室したときの対応、感染症の早期発見、感染症発生時の対応、心や性等の健康問題のある児童生徒への指導、保健室登校児へ対応、健康診断への教員の共通理解、感染症に関する情報提供、保健室経営に関する教員の共通理解、学校保健の校内での共通理解、環境衛生活動の連携、環境衛生活動に対する共通理解、家庭への対応、専門家・専門機関との連携、衛生検査の実施、健康診断実施計画の作成、情報の統計処理、学校保健に関する実態把握のための時間確保【19】
鎌田 (2016)	新規採用3年未満の養護教諭が抱く職務上困難感の高い内容について調査するために、養護教諭の職務内容について4件法による質問紙調査を実施	結果において、困難として取り上げられた困難を感じる、やや感じると答えた割合が60%以上の項目	疾病の予防、健康課題対応、保健学習TT、総合的学習、個別保健指導、特別活動保健指導、児童生徒保健委員会、教職員保健委員会、保健室経営計画の周知、PTA保健委員会、学校保健委員会、研究、保健室経営計画【13】
鈴木 他 (2017)	新任養護教諭が抱える困難とその対処について調査するために、インタビュー調査を実施	困難としてまとめられたもの全て	自信のないまま行う処置対応、貧困家庭の子どもへの支援の困難さ、様々な背景を抱えた子ども対応への難しさや葛藤、未経験の指導の困難、子ども対応に必要な担任との情報共有が不十分、子ども対応の優先及び決定は担任や学年が行う、特別支援の子どもに関する担任との連携、複数配置が故に表面化してきた業務分担の問題、複数配置の問題点と課題、前任者との人間関係、保護者とのやりとり慣れず神経を使う、着任早々の健診に対する不安、未経験の事務処理に直面しての戸惑い、予想外の校務分掌【14】
松元 他 (2019)	養護教諭の職務負担感やその対処について調査するために、仕事の負担度に関する尺度7項目について4件法による質問紙調査を行い、経験年数の違いに着目して検討	結果において、困難として取り上げられ、調査で扱われた項目7個	学習意欲に欠ける児童生徒への対応、不登校や問題を抱える児童生徒やその保護者との関係維持、発達障がいのある児童生徒への対応、児童生徒の過剰な期待や要求、保健指導を行う際のコミュニケーションや細かい指導の充実、他の先生と仕事上の調整や役割分担、保護者からの過剰な期待や要求【7】

注) 【 】内の数字については、困難の数を示している。

登校」「生徒間のいじめ」の3個が抽出された。

高橋・中村(2006)は、養護教諭が抱えている教育上の困難な問題の実態について、自由記述による質問紙調査をした。困難には、「子ども自身の問題」「養護教諭の職務上の問題」「学校教職員の問題」などにまとめられた6個が抽出された。

佐光他(2008)は、養護教諭が日常の養護実践において感じる困難感と研修ニーズについて、カードの枚数に制限を加えずに、1枚のカードに1項目を自由記述する調査をした。困難には、「救急処置」「子どもへの保健室での対応」「健康相談活動」などにまとめられた13個が抽出された。

中下・高橋・佐光(2010)は、経験の浅い養護教諭が抱く職務上困難感と課題について、自由記述と3件法による質問紙調査をした。新規採用者の困難には「感染症予防」など3個、5年経験者の困難には「集団指導」など6個が抽出された。さらに、新規採用者・5年経験者とも困難感を示したものは、「学校保健委員会」など4個が抽出された。

石田・園田(2016)は、一人配置の養護教諭が抱く職務上困難感について、4件法による質問紙調査を行い、自己教育力との関連を検討した。困難には、「救急処置」「受診が必要かどうかの判断」「複数来室したときの対応」など19個が抽出された。

鎌田(2016)は、新規採用3年未満の養護教諭が抱く職務上困難感の高い内容について、4件法による質問紙調査をした。困難には、「疾病の予防」「健康課題対応」「保健学習 TT(ティームティーチング)」など13個が抽出された。

鈴木・岡本・重田・鈴木(2017)は、新任養護教諭が抱える困難とその対処について、インタビューによる調査をした。困難には、「自信のないまま行う処置対応」「貧困家庭の子どもへの支援の困難さ」「様々な背景を抱えた子ども対応への難しさ」と葛藤などにまとめられた14個が抽出された。

松元・満田(2019)は、養護教諭の職務負担感やその対処について、4件法による質問紙調査を行い、経験年数の違いに着目して検討した。困難には、「学習意欲に欠ける児童生徒への対応」「不登校や問題を抱える児童生徒やその保護者との関係維持」「発達障がい児童生徒への対応」など7個が抽出された。

対象文献の困難は、以上の128個が抽出された。

困難の分類において、「校外における一般教育関係」「校内における一般教育関係」(池田・芝木, 1985)、「学校保健専門職の配備」「財政的問題」「研修の機会が少ない」(佐藤, 1995)は、どのようなことが困難で研修の機会が少ないと感じているのかなど、内容に関する詳細な記載がなく、分類が困難と判断し除外した。そのため、123個の困難を分類の対象とした。

2 困難の分類

結果1では、各研究から困難を抽出した。抽出された困難は、対人的な業務と非対人的な業務の枠組みで分類し、対人的な業務については、児童生徒、教職員、保護者、関係機関の枠組みで分類した。そして、各枠組みに分類された困難は、意味内容の類似性で統合し、カテゴリーを生成した(Table 2)。

各枠組みへの分類については、以下で説明する。

対人的な業務については、「救急処置」(佐光他, 2008)「教職員との関係」(佐光他, 2008)「保護者の問題」(高橋・中村, 2006)「専門家・専門機関との連携」(石田・園田, 2016)などの児童生徒や教職員、保護者、関係機関に関する困難を分類した。

児童生徒の困難については、対人的な業務に分類された中で、「救急処置」(佐光他, 2008)「心の健康問題に対するカウンセリング能力」(萩野他, 2002)「保健教育」(佐光他, 2008)などの児童生徒に関係するもの53個を分類した。

教職員の困難については、対人的な業務に分類された中で、「保健室経営に関する教員の共通理解」(石田・園田, 2016)「複数配置の問題点と課題」(鈴木他, 2017)などの教職員に関係するもの31個を分類した。

保護者の困難については、対人的な業務に分類された中で、「地域における父母との連携や理解協力に関すること」(佐藤, 1995)「保護者との関係」(佐光他, 2008)などの保護者に関係するもの10個を分類した。

関係機関の困難については、対人的な業務に分類された中で、「校外機関との関係」(佐光他, 2008)「専門家・専門機関との連携」(石田・園田, 2016)などの関係機関に関係するもの5個を分類した。

非対人的な業務については、「学校保健委員会」(中下他, 2010)「時間的ゆとりの欠如」(佐光他, 2008)などの非対人的な業務に関係するもの24個を分類した。

次に、各枠組みに分類された困難を、意味内容の類似性で統合して生成したカテゴリーについて説明する。なお、以降では、カテゴリーを[]で表記する。

児童生徒の困難において、「救急処置」(石田・園田, 2016)「自信のないまま行う処置対応」(鈴木他, 2017)は、児童生徒への救急処置や処置対応に関する困難として統合した。そして、その他の児童生徒への処置対応における困難を意味しているものを統合して[処置対応]を生成した。

「生徒の保健室登校」(小島, 2002)「健康相談活動」(佐光他, 2008)は、心の問題を抱える児童生徒への対応に関する困難として統合した。そして、その他の健康相談活動における困難を意味しているものを統合して[健康相談活動]を生成した。

Table 2 一般校の養護教諭が職務上抱える困難の分類

枠組み	カテゴリー	対象文献で見出された困難の例
	処置対応	救急処置(佐光他, 2008) 日常における救急処置・救急体制(中下他, 2010) 救急処置, 受診が必要かどうかの判断(石田他, 2016) 自信のないまま行う処置対応(鈴木他, 2017) 等【14】
	児童生徒 健康相談活動	心の健康問題に対するカウンセリング能力(萩野他, 2002) 不登校児, 生徒の保健室登校(小島, 2002) 健康相談活動(佐光他, 2008) 健康相談活動における方法(中下他, 2010) 不登校や問題を抱える児童生徒やその保護者との関係維持(松元他, 2019) 等【21】
対人的な業務	保健指導・保健学習	保健学習のための資料の提供・助言(池田他, 1985) 保健教育(佐光他, 2008) 個別指導, 保健学習(中下他, 2010) 個別保健指導(鎌田, 2016) 等【18】
	教職員 教師との連携	養護教諭の職務や仕事に対するまわりの理解が得られない(佐藤, 1995) 教職員との関係(佐光他, 2008) 保健室経営に関する教員の共通理解, 学校保健の校内での共通理解(石田他, 2016) 子ども対応に必要な担任との情報共有が不十分(鈴木他, 2017) 等【28】
	養護教諭間の関係	複数配置が故に表面化してきた業務分担の問題, 複数配置の問題点と課題, 前任者との人間関係(鈴木他, 2017)【3】
	保護者 保護者による要望への対応	地域における父母との連携や理解協力に関すること(佐藤, 1995) 保護者の問題(高橋他, 2006) 保護者との関係(佐光他, 2008) 家庭への対応(石田他, 2016) 保護者からの過剰な期待や要求(松元他, 2019) 等【10】
	関係機関 校外機関との関係	健康相談における関係者との話し合い(池田他, 1985) 校外機関との関係(佐光他, 2008) 専門家・専門機関との連携(石田他, 2016) 等【5】
非対人的な業務	多様な業務への対応	雑務が多くて本来の仕事ができない(佐藤, 1995) 学校保健委員会(中下他, 2010) 健康診断実施計画の作成, 情報の統計処理(石田他, 2016) 等【19】
	業務の量的負担	児童生徒との日常的かかわりにおける時間的余裕(萩野他, 2002) 時間的ゆとりの欠如, 勤務時間外の業務(佐光他, 2008) 等【5】

注) 【 】内の数字については, 困難の数を示している。

「個別保健指導」(鎌田, 2016)「保健学習」(中下他, 2010)は, 個別的な保健指導や, 集団で行われる保健学習に関する困難として統合した。そして, その他の保健指導や保健学習における困難を意味しているものを統合して[保健指導・保健学習]を生成した。

教職員の困難において, 「養護教諭の職務や仕事に対するまわりの理解が得られない」(佐藤, 1995)「子ども対応に必要な担任との情報共有が不十分」(鈴木他, 2017)は, 教師との関係性や連携に関する困難として統合した。そして, その他の教師との関係や連携における困難を意味しているものを統合して[教師との連携]を生成した。

「複数配置が故に表面化してきた業務分担の問題」
「前任者との人間関係」(鈴木他, 2017)は, 養護教諭間の関係や業務分担に関する困難として統合した。そして, その他の養護教諭間の関係や分担における困難

を意味しているものを統合して[養護教諭間の関係]を生成した。

保護者の困難において, 「家庭への対応」(石田・園田, 2016)「保護者からの過剰な期待や要求」(松元・満田, 2019)は, 保護者からの要望への対応に関する困難として統合した。そして, その他の保護者からの要望への対応における困難を意味しているものを統合したところ, この枠組みに分類されたもの全てが統合され[保護者による要望への対応]を生成した。

関係機関の困難において, 「健康相談における関係者との話し合い」(池田・芝木, 1985)「校外機関との関係」(佐光他, 2008)は, 校外機関との関係や連携に関する困難として統合した。そして, その他の校外機関との関係や連携における困難を意味しているものを統合したところ, この枠組みに分類されたもの全てが統合され[校外機関との関係]を生成した。

非対人的な業務において、「雑務が多くて本来の仕事ができない」(佐藤, 1995)「健康診断実施計画の作成」(石田・園田, 2016)は、さまざまな業務に対応することに関する困難として統合した。そして、その他の多様な業務への対応における困難を意味しているものを統合して[多様な業務への対応]を生成した。

「児童生徒との日常的かかわりにおける時間的余裕」(萩野他, 2002)「勤務時間外の業務」(佐光他, 2008)は、業務の量が多いことに関する困難として統合した。そして、その他の業務が量的に多いことに関する困難を意味しているものを統合して[業務の量的負担]を生成した。

IV. 考察

本研究では、先行研究で明らかにされている一般校に勤務する養護教諭の困難を整理し、対人的な業務と非対人的な業務の枠組みで分類した。その結果、対人的な業務については、児童生徒の困難において[処置対応][健康相談活動][保健指導・保健学習]、教職員の困難において[教師との連携][養護教諭との関係]、保護者の困難において[保護者による要望への対応]、関係機関の困難において[校外機関との関係]が見出された。非対人的な業務については、[多様な業務への対応][業務の量的負担]が見出された。

考察では、5つの枠組みに分類された困難とその軽減策、今後の方向性について考察を行うこととする。

児童生徒の困難については、[処置対応][健康相談活動][保健指導・保健学習]に関する困難にまとめられた。児童生徒に関する困難を統合し、その他の困難と分けたことにより、養護教諭が抱える困難は、対人的な業務の中でも児童生徒に関する困難が多くを占めていることが明らかとなった。そして、心身の健康問題が深刻化している現在は、対応の困難さがこれまで以上に高まっていると考えられる。

このような状況の養護教諭について、佐光他(2008)は、スーパーバイズを含めた養護教諭の職務をサポートする体制づくりが必要であると述べている。また、岩崎・渡辺(2016)は、健康相談活動の力量を高めるために、事例検討を行う必要があると述べている。

養護教諭のサポート体制、力量の向上は、養護教諭が抱える困難の軽減のために重要である。しかし、今後も深刻化が進むと考えられる心身の健康問題に対応するためには、担任教師をはじめ、管理職、生徒指導主事、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー、関係機関の専門家、そして保護者の力が必要である。そこで、児童生徒への対応に関する軽減策については、対応方針や役割分担について、関係者との合意形成を図りながら、チームで対応することが必要であり、どうすればチームが機能するのかが今後の課題であると考えられる。

保護者の困難については、カテゴリは1つで構成されたが、小島(2002)以外の対象文献全てにおいて困難としてあげられていた。小島(2002)については、予め用意された保護者に関する質問項目が「親による生徒の虐待や遺棄」となっており、結果において困難として取り上げられていなかったため本研究の対象からは除外されていた。つまり、養護教諭は、保護者への対応に関する困難を抱えているといえる。そして、近年の児童生徒の抱える問題の深刻化に伴い、より個別的で丁寧な保護者への対応が求められていると考えられる。

一方で、保護者は、児童生徒が抱える問題に対応するとき、重要な援助チームの一員となる(石隈, 1999)。保護者との関係が良好であれば、養護教諭と児童生徒との関係にもよい影響を与えると考えられる。そこで、保護者への対応についても、教師や関係機関と連携し、役割分担をしながらチームで対応し、保護者の願いや思いを受け止めて、保護者と良好な関係を築いていくことが望まれる。

関係機関との連携は、児童生徒や保護者への対応において重要であるが、関係機関に関する困難は、児童生徒・教職員・保護者と比較すると、最も少数であった。その理由については、連携を図ることができているからか、連携する機会自体が少ないのか、対象文献から読み取ることができなかった。全体的な傾向として、養護教諭が関わる頻度の高い、児童生徒や教師に関する困難が多くあげられていることを踏まえると、一般校において、健診や検査などの定期的なものを除く関係機関との連携は多くはないのではないかと推察される。青柳・阿久澤(2017)は、関係機関の職員が養護教諭の職務を理解し、ネットワークの一員として活用しているとは言えないとし、学校と関係機関が連携するために、お互いの役割を理解することが必要だと述べている。今後は、お互いの役割を理解し、連携して児童生徒への対応をした事例を積み重ねていく中で、連携がうまくいった要因やうまくいかなかった要因について検討していく必要がある。

そして、教職員の困難において、教師との連携については、11件の対象文献の内、10件の文献において困難としてあげられていた。困難としてあげられていなかった小島(2002)では、教師に関する項目が「同僚からのいじめ」となっており、結果において困難として取り上げられていなかったため本研究の対象からは除外されていた。

いつの時代においても、教師との連携が困難となっているのは、その立場や役割の違いからお互いを理解することが難しいのではないだろうか。井・鈴木(2018)は、養護教諭と教師は職務上の心がけが異なるため、養護教諭の職務や悩みが教師から理解されにくいと述べている。つまり、養護教諭の悩みや考えが

教師に理解されにくいことが、教師との連携における困難に影響していると考えられる。

梅澤・鎌塚(2020)は、専門職連携教育(以下、「IPE」と記す)の実践として、2つの異なる専攻の学生が連携授業をしたことにより、お互いの専門性を理解し、尊重しながら、具体的場面における役割分担のイメージが醸成されたことを報告している。今後、養護教諭と教師がお互いを理解し、連携・協働体制を機能させていくには、養成段階におけるIPEの導入が重要になってくると考えられる。

また、養護教諭間の関係については、養護教諭が複数配置の場合、分担が難しい業務はお互いに確認が必要となり、それが業務の遂行における困難としてあげられていた。複数配置については、「相談・検討できる」「児童生徒への対応が充実する」などの利点が報告されている(後藤・小川・内山, 2005)。宮慶(2020)は、養護教諭同士の人間関係を円滑にしている要因の一つとして、複数配置の経験年数があることを報告している。養護教諭の複数配置については、メリットも多いが、複数配置の経験が少ない養護教諭にとっては困難にもなると考えられる。

養護教諭が抱える困難を、対人的な業務と非対人的な業務に分けると、大半は対人的な業務であったが、非対人的な業務も一定数あげられた。非対人的な業務については、[多様な業務への対応][業務の量的負担]としてまとめられた。非対人的な業務は、主に事務作業であったが、その中でも学校保健委員会に関する困難が複数あげられていた。学校保健委員会は、校長、教頭、校務主任、学年主任、保護者、学校医、関係機関等が構成員となり、議題に応じて関係者の参加を得るなど弾力的に効果的な運営が必要である(采女, 2019)。その中で、養護教諭は、企画調整・運営という役割を任されている。しかし、扱う情報量が多く、参加者も多いことから負担となっていることが推察される。さらに、その他の業務が多数あり、養護教諭に求められるものが多すぎる状況になっている(高橋・中村, 2006)。一人の養護教諭が抱えている業務について、物理的に量を減らす工夫が必要である。そこで、事務作業等の業務を精選するとともに、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー等が、学校保健委員会で話題提供をするなど、業務の一部を分担できるような仕組みが望まれる。

今後の課題について、本研究では、一般校に勤務する養護教諭の職務全体における困難を扱った先行研究に焦点をあてたため、対象文献の数が限られてしまった。今後は、養護教諭が抱える困難に関係する文献の対象を広げ、一般校の養護教諭の困難についてさらに検討する必要があるだろう。また、養護教諭が抱える困難は、どう対応されており、どのような軽減策があるのかについて、さらに調査する必要があると考える。

引用文献

- 青柳千春・阿久澤智恵子(2017). 児童虐待対応における校外関係機関と養護教諭との連携の現状—校外関係機関の職員への質問紙調査から—高崎健康福祉大学紀要, 16, 39-48.
- 中央教育審議会(2008). 子どもの心身の健康を守り、安全・安心を確保するために学校全体としての取組を進めるための方策について(答申)
- 後藤ひとみ・小川佳子・内山奈美子(2005). 複数配置校における養護教諭の活動実態—日の活動及び保健室来室者への対応から捉えた利点—愛知教育大学研究報告(教育科学編), 54, 47-55.
- 萩野和美・林照子・江原悦子・木村龍雄(2002). 養護教諭の力量形成に関する研究(その1)—学校保健活動展開における困難要因に関する分析—大阪教育大学紀要(第IV部門:教育科学), 50(2), 459-471.
- 池田哲子・芝木美沙子(1985). 僻地小規模校における養護教諭の職務内容に関する研究(第4報)—職務遂行上の困難点と克服の視点—僻地教育研究, 39, 113-122.
- 石田有紀・園田直子(2016). 一人配置の養護教諭の自己教育力と職務上困難感との関連—応用心理学研究, 42, 12-19.
- 石隈利紀(1999). 学校心理学—教師・スクールカウンセラー・保護者のチームによる心理教育的援助サービス—誠信書房
- 岩崎和子・渡辺俊之(2016). 養護教諭の現職研修に関する研究の動向—日本健康相談活動学会誌, 11, 16-31.
- 井陽介・鈴木翔(2018). 養護教諭が抱える職務の困難性に関する一考察—男性一般教員・女性一般教員・養護教諭の三者比較から—日本養護教諭教育学会誌, 21(2), 95-101.
- 鎌田かおる(2016). 大学における養護教諭養成教育に求められること—四国大学人間生活科学研究年報, 9, 21-28.
- 川畑輝子・村中峯子・中村正和(2020). ヘルスプロモーション研究センター作成教材「コロナに負けない! 新型コロナ長期戦に向けた心と体づくり」の紹介—月間地域医学, 34, 714-719.
- 菊池紀美子・二木はま子・奥井現理(2014). 児童生徒の心因性の健康相談に対して養護教諭が抱えている困難とその対応—飯田女子短期大学紀要, 31, 89-114.
- 小島秀夫(2002). 「教師の意識」全国調査の分析(14)養護教諭が体験した困難—教職研修, 31(2), 84-87.
- 松元理恵子・満田タツ江(2019). 養護教諭の職務負

- 担感とストレス対処について—経験年数に焦点をあてて 鹿児島女子短期大学紀要, 56, 49-56.
- 宮慶美恵子 (2020). 複数配置校における養護教諭同士の人間関係を円滑にしている要因の検討 東海学校保健研究, 44, 17-28.
- 文部科学省 (2021). 生徒指導上の諸課題の現状と文部科学省の施策について 文部科学省初等中等教育局児童生徒課
- 諸富祥彦・大竹直子 (2002). 教師の人間関係の悩みとその対応策 教育と医学, 50(3), 23-30.
- 中下富子・高橋英子・佐光恵子 (2010). 経験の浅い養護教諭が抱く職務上の困難感と課題—A県スクールリーダー事業にかかわる調査結果から 埼玉大学紀要 (教育学部), 59(2), 79-94.
- 岡本陽子・郷木義子 (2021). 最新：学校保健 ふくろう出版
- 佐光恵子・伊豆麻子・田村恭子・市川真知子・上原美子・福島きよの・中下富子 (2008). 養護教諭が日常の養護実践において感じる困難感と研修ニーズ 日本養護教諭教育学会誌, 11, 26-32.
- 佐藤 理 (1995). 養護教諭の執務に関する研究(1) —執務における困難点及び満足・不満足要因調査から 福島大学教育学部論集 (教育・心理部門), 57, 25-35.
- 柴田優里絵・齋藤美和・山脇京子 (2020). 養護教諭が抱く困難感に関する文献検討 インターナショナル Nursing Care Research, 19(1), 159-168.
- 鈴木菜々・岡本美和子・重田唯子・鈴川一宏 (2017). 新任養護教諭が抱える困難とその対処に関する研究 日本体育大学紀要, 46, 137-149.
- 高橋のぞみ・中村朋子 (2006). 養護教諭の抱えている教育上の困難に関する調査研究 茨城大学教育学部紀要 (教育科学), 55, 333-343.
- 武田和子・三村由香里・松枝睦美・河本妙子・上村弘子・高橋香代 (2008). 養護教諭の救急処置における困難と今後の課題—記録と研修に着目して 日本養護教諭教育学会誌, 11, 33-43.
- 梅澤 収・鎌塚優子 (2020). 学級担任と養護教諭の連携・協働のための学び—新しい教員養成カリキュラム・授業実践の取組み 静岡大学教育実践総合センター紀要, 30, 18-27.
- 采女智津江 (2019). 新養護概説 <第11版> 少年写真新聞社